

## 執筆者紹介

山岡道男（やまおか・みちお）：「はじめに」，「おわりに」，第9章

1948年東京生まれ。1976年早稲田大学経済学研究科博士課程中退。学術博士（早稲田大学）。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授。早稲田大学国際学術院教授。専攻：国際交流論，経済学教育論，ニュージーランド研究。

【単著】『アジア太平洋時代に向けて：その前史としての太平洋問題調査会と太平洋会議』（北樹出版，1991年5月），『アジア太平洋地域のINGO：IPR，PBEC，PAFTAD，PECC』（北樹出版，1996年5月），『「太平洋問題調査会」研究』（龍溪書舎，1997年7月），『国際関係に関する知の制度化：オーストラリア・ニュージーランド・カナダにおける太平洋問題調査会と国際問題研究所の発足過程』（論創社，2005年3月），『太平洋問題調査会関係資料：太平洋会議参加者名簿とデーター・ペーパー一覧』（早稲田大学アジア太平洋研究センター，2010年3月）。

【編著】『黎明期アジア太平洋地域の国際関係：太平洋問題調査会（IPR）の研究』（早稲田大学社会科学研究所，1994年3月），『戦間期のアジア太平洋地域：国際関係とその発展』（早稲田大学社会科学研究所，1996年7月），『太平洋問題調査会（1925～1961）とその時代』（春風社，2010年3月）。

片桐庸夫（かたぎり・のぶお）：第1章，第10章

1948年群馬県生まれ。1976年慶應義塾大学法学研究科博士課程単位取得満期退学。法学博士（慶應義塾大学）。群馬県立女子大学名誉教授。早稲田大学アジア太平洋研究センター特別センター員。専攻：国際関係学，外交史。

【単著】『太平洋問題調査会の研究』（慶應義塾大学出版会，1987年10月，吉田茂賞），『民間交流のバイオニア 渋沢栄一の国民外交』（藤原書店，2013年12月）。

【共著】『冷戦期の国際政治』（慶應義塾大学出版会，1987年9月），『季刊国際政治102 環太平洋国際関係史のイメージ』（日本国際政治学会，1993年2月），『アジアの中の日本と中国』（山川出版社，1995年10月），『公益の追求者 渋沢栄一』（山川出版社，1999年3月），『時代の先駆者 後藤新平』（藤原書店，2004年10月），『アジア太平洋戦争の意義』（三和書籍，2005年12月），*Hawai'i at the Crossroads of the U.S. and Japan before the Pacific War*, University of Hawai'i Press, August 2008，『慶應の政治学』（慶應義塾大学法学部，2008年12月），『岩波講座 東アジア近現代通史』第4巻（岩波書店，2011年3月）。

高光佳絵（たかみつ・よしえ）：第2章

1970年生まれ。2000年一橋大学大学院法学研究科博士後期課程修了。博士（法学）。千葉大学大学院人文社会科学研究所助教。専攻：アメリカ外交史，東アジア国際政治史。

【単著】『アメリカと戦間期の東アジア』（青弓社，2008年3月）。

【共著】川島真編『近代中国をめぐる国際政治』（中央公論新社，2014年12月），杉田米行編『1920年代の日本と国際関係』（春風社，2011年3月），杉田米行編『アメリカ外交の分析：歴史的展開と現状分析』（大学教育出版，2008年4月），服部龍二・土田哲夫・後藤春美編『戦間期の東アジア国際政治』（中央大学出版部，2007年6月）。

【論文】「国際主義知識人のトランスナショナル・ネットワークと満州問題」（『史学雑誌』123-11，2014年11月），「日中戦争期の太平洋をめぐる米豪関係」（『アメリカ研究』46，2012年3月）。

飯森明子（いいもり・あきこ）：第3章，第11章

1957年大阪生まれ。1980年津田塾大学学芸学部国際関係学科卒。2000年常磐大学大学院人間科学研究科博士課程修了。博士（人間科学）（常磐大学）。常磐大学国際学部非常勤講師。専攻：日本外交史，国際交流論。

【共編著】『日中友好議員連盟関係資料 第1期～第3期』（現代史料出版，2002年-2006年）。

【共著】『関東大震災と日本外交』（草思社，1999年8月）、『日米文化交流史』（学陽書房，2006年），『太平洋問題調査会とその時代』（春風社，2010年3月），『もう1つの日米交流史：日米協会資料で読む20世紀』（中央公論新社，2012年4月）。

堀内暢行（ほりうち・のぶゆき）：第4章

1978年東京生まれ。2012年国士舘大学人文科学研究科博士課程修了。学術博士（国士舘大学）。国士舘大学文学部非常勤講師，同大学法学部比較法制研究所特別研究員。専攻：大戦間期国際交流史。

【論文】「1929年第3回太平洋会議に関する一考察：満洲問題討議の準備過程における日本IPRを中心に」（『東アジア近代史』第11号，2008年3月），「1920年代における『国民外交』論：言説に見る論理と知識人の役割」（『国士舘史学』第15号，2011年3月）。

山内晴子（やまうち・はるこ）：第5章，第12章

1944年1月東京生まれ。2008年早稲田大学アジア太平洋研究科後期博士課程修了。学術博士（早稲田大学）。函館遺愛女子高校社会科元講師。玉川聖学院高等部英語科元講師。早稲田大学アジア太平洋研究センター元特別センター員。朝河貫一研究会理事。専攻：近代日本外交論，朝河貫一研究。

【単著】『朝河貫一新論：日本外交の理念』（東洋英和女学院大学大学院現代史センター，2003年2月），『朝河貫一論：その学門形成と実践』早稲田大学モノグラフ 第2巻（早稲田大学出版部，2009年1月），『朝河貫一論：その学門形成と実践』早稲田大学学術叢書 第7巻（早稲田大学出版部，2010年3月）。

【共著】「朝河貫一：ACLS（全米学術団体協議会）日本研究委員会と太平洋問題調査会」（山岡道男編著『太平洋問題調査会（1925～1961）とその時代』春風社，2010年3月，77-118頁），山岡道男・増井由紀美・五十嵐卓・山内晴子・佐藤雄基『朝河貫一資料：早稲田大学・福島県立図書館・イエール大学他所蔵』早稲田大学アジア太平洋研究センター，研究資料シリーズ第5号（国際文献社，2015年2月）。

【論文】「キリスト教の寛容：朝河貫一の日本外交の理念の場合」（『キリスト教史学』第58集，2004年7月，92-113頁），「朝河貫一：幼少年期の知的精神的成長」（『早稲田大学アジア太平洋研究科論集』12号，2006年6月，145-170頁），「朝河貫一在学時代の東京専門学校とキリスト教」（『キリスト教史学』第62集，2008年7月，160-178頁），「明日へのことば：歴史学者・朝河貫一に教えられたこと」（『ラジオ深夜便』2011年12月号，NHKサービスセンター，41-55頁），「朝河貫一と埴原正直：日米関係における外交提言」（『アジア太平洋討究』第19号，早稲田大学アジア太平洋研究センター，2013年1月，103-127頁），増田弘・山内晴子「朝河貫一と石橋湛山の比較外交論」（上）（『自由思想』石橋湛山記念財団，第129号，2013年4月，39-54頁，同（下）（第130号，2013年8月，38-56頁），「朝河貫一の日本外交理念と学問の実践」（『講演会記録Ⅲ：文化・思想の諸断面』公益財団法人俱進会，2013年12月，58-73頁），「朝河貫一の理想主義と現実主義：天皇制民主主義の学問的起源」（『現代史研究』第10号，東洋英和女学院大学現代史研究所，2014年3月，127-185頁）。

上品和馬（うえしな・かずま）：第6章

1957年京都生まれ。2007年早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際関係学専攻博士後期課程修了。学術博士（早稲田大学）。早稲田大学日本語教育研究センター・インストラクター（非常勤）。公益財団法人アジア学生文化協会講師。専攻：国際交流，異文化コミュニケーション，日本語教育。

【単著】『鶴見祐輔の広報外交：一「自由主義的」保守主義者の活動の特徴とその限界性』（早稲田大学出版部，2011年2月），『広報外交の先駆者・鶴見祐輔：1885-1973』（藤原書店，2011年5月）。

【共著】『文化財修復整備技術研修コース設定基礎調査団報告書』（国際協力事業団，1991年12月），『時代が求める後藤新平：自治／公共／世界認識』（藤原書店，2014年6月），『一人に人 二人に人 三人に人：近代日本と「後藤新平山脈」100人』（藤原書店，2015年7月）。

三牧聖子（みまき・せいこ）：第7章

1981年東京生まれ。2012年東京大学大学院総合文化研究科博士過程修了。学術博士（東京大学）。関西外国語大学外国語学部助教。専攻：国際関係論，アメリカ外交，日米関係。

【単著】『戦争違法化運動の時代：「危機の20年」のアメリカ国際関係思想』（名古屋大学出版会，2014年10月）。

【編著】『歴史の中のアジア地域統合』（勁草書房，2012年6月）。

【共著】杉田米行編『アメリカ外交の分析：歴史的展開と現状分析』（大学教育出版，2008年）。

【論文】「『危機の20年』（1939）の国際政治観：パシフィズムとの共鳴」（『年報政治学』2008-1，2008年）。

篠原初枝（しのはら・はつえ）：第8章

1959年東京生まれ。1996年シカゴ大学歴史学研究科博士課程修了。シカゴ大学Ph.D.（歴史学）。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授。早稲田大学国際学術院教授。専攻：国際関係論，国際関係史。

【単著】『戦争の法から平和の法へ：戦間期のアメリカ国際法学者』（東京大学出版会，2003年5月），『国際連盟』（中央公論新社，2010年5月），*US International Lawyers in the Inter-war Years: A Forgotten Crusade*, Cambridge University Press, September 2012.

【訳書】入江昭著『グローバル・コミュニティ』（早稲田大学出版部，2006年1月）。

【論文（分担執筆）】「アメリカ正戦論」（『アメリカ研究の越境』第5巻，紀平英作・油井大三郎編『グローバリゼーションと帝国』，ミネルヴァ書房，2006年12月），「戦間期国際秩序における国際連盟」（田中孝彦・青木人志編『戦争のあとに』勁草書房，2008年10月），「原爆投下と戦後国際秩序」（『東アジア近現代通史』第6巻，後藤乾一編『アジア太平洋戦争と大東亜共栄圏』，岩波書店，2011年1月），「国際連盟外交：ヨーロッパ国際政治と日本」（井上寿一編『日本の外交』第1巻，岩波書店，2013年2月）。